「歸去來兮辭」の「辭」について

釜谷武志
神戸大學

陶淵明のあまたある作品の中で最もよく知られるものの一つは「歸去來兮辭」であろう。とりわけ冒頭の「歸去來兮、田園將蕪胡不歸」は、「歸りなんいざ、田園將に蕪れんとす　胡ぞ歸らざる」という獨特の訓讀とあいまって、人口に膾炙した名句といえよう。ところで陶淵明にとって、この「歸去來兮辭」は「辭」のジャンルに屬する唯一の作品であって、他に同ジャンルの作品は見あたらない。しかも彭澤の令を辭して園田の居に歸るということは、淵明にとってきわめて大きな意味をもつ決意と行動であったはずである。それを記すにあたって、どうして「辭」の形式を選んだのであろうか。たとえば小尾氏は次のように述べておられる。

要するに淵明は、辭賦文章には、より多くの關心を示さなかったといえよう。ただ、いま故郷に歸る決意を、なぜ辭賦で歌いあげたのか。その眞意はわからないが、「歸らんかな」の情を述べようとする時、彼の好きな古き體の四言詩、また得意とする新興の五言詩では、十分感慨を述べ切れないと考えたのであろう。故郷に歸って味わった田園生活は、「園田の居に歸る」がごとき五言詩で、十分に歌えるし、「農を勸む」がごとき四言詩で、滿足できると思ったかも知れないが、「歸らんかな」の情を歌うには、辭賦でなければふさわしくないと考えたのであろう。①

確かに彭澤縣の長官を辭任して郷里に戻った後の作と考えられるものに、「歸園田居詩」五首があり、これは五言詩である。とすれば、歸郷の決意を述べるのに「辭」なる形式を選擇したのは、おそらく何らかの理由があったと考えられる。たとえその眞意は分からないにしても、理由について檢討を加えることは、この作品のもつ意義を考える上で決して無意味ではなかろう。よってここに本稿を草し、

一つの考えを提示してみたい。

一

「歸去來兮辭」②には序が附されている。そこではこの作品を創作するに當たってのいきさつが記されている。それによると次の通りである。

家が貧しくて農耕だけでは生活してゆくのに不十分であったため、叔父のつてを頼りに小さな町彭澤縣に勤めることになった。彭澤にしたのは、不穏な時勢を勘案して遠くに行くのが憚られ、この地が郷里から百里ばかりの近さにあったことと、官田からの收入が酒を作るのに十分であったことによる。しかるに、程なく郷里に歸りたいとの氣持ちがわきおこってくる。すなわち、

「少日に及んで、眷然として歸らんかなの情有り。何となれば、則ち質性の自然は、矯厲するの得る所に非ず。飢凍は切なりと雖も、己に違えば交ごも病む。嘗て人事に從うは、皆な口腹に自ら役す。是に於て悵然として慷慨し、深く平生の志に媿ず」。

そんな氣持ちになったのは、仕官をせずに丘や山の中で暮らしたいと願う、生まれつきの性格は無理に變えることができないから。飢えや凍えは切實ではあるが、自分の本心に背く行いをすれば、よけいに惱むことになる。かつて仕官したのも、生活してゆくためであったことを思うと、ふだんからの自分の志に恥じ入る、という。そしてより直接的な辭任の經過が次に述べられる。

「猶お一稔して裳を斂めて宵に逝くべしと望むも、尋いで程氏の妹武昌に喪す。情は駿奔に在り、自ら免じて職を去る。仲秋より冬に至るまで、官に在ること八十餘日。事に因りて心に順う。篇に命づけて『歸去來兮』と曰う。乙巳の歳十一月なり」。

あと一年辛抱しようと思っていたが、程氏に嫁いでいた妹が武昌で亡くなったために、それを機に職を辭したというのである。結局、彭澤の令をつとめたのは、八月から十一月までの八十日餘りでしかない。

彭澤令辭任のきっかけについて、『宋書』本傳や昭明太子「陶淵明傳」では、郡の督郵に會う際に正裝するように

と縣の役人から言われたため、「我　五斗米の爲に腰を折って鄉里の小人に向かう能わず」と言い、卽日辭職したとする。『宋書』などで描かれる淵明像は確かに、高潔な人柄を強調するために實際以上に誇張されて、ドラマチックに仕立て上げられた可能性もある。③したがって辭任の眞の理由は定かでない、というほかなく、妹の死もおそらくは一つのきっかけに過ぎないだろう。ただ、「序」でも述べられているように、生來世俗と切り離された自然の中での生活を希求していたにもかかわらず、意に染まぬ仕官を餘儀なくされたことが原因の一つとなって、辭職のきっかけをねらいつつたえず底流していたことはまちがいない。とすれば、「歸去來兮辭」制作の動機の一つが、仕官を辭めて園田の居に歸ることにあったのは、明らかである。

次にこの作品の題名について檢討してみよう。「歸去來兮辭」というが、自序には「篇に命づけて『歸去來兮』と曰う」と述べており、ここでの作品名としては「歸去來兮」であって、「辭」は附いていない。また、『宋書』本傳では「卽日印綬を解きて職を去る。『歸去來』を賦す、其の詞に曰く……」として、その後に作品本文（序を除く）の引用が續く。すなわち題として擧がっているのは「歸去來」であり、それを「賦」したのだという。『晉書』、『南史』の本傳、昭明太子「陶淵明傳」、さらにはこの作品を載錄する『文選』卷四五も、題名としては「歸去來」に作る。ならば、「歸去來兮辭」という題は、後人の手によるものであろうか。

これについて松浦氏は、現行『陶集』諸本がいずれも「歸去來兮辭」に作っていること、作品名の略記は必ずしも珍しくないこと、『文選』で「賦」でなしに「辭」の部に分類されていること、淵明自身「歸去來兮賦」に作っていないこと、などから、「少なくとも、淵明自身、および、六朝期の知識人社會において、この作品が狹義の『賦』とは異なる狹義の『辭』として、作られ、讀まれていたこと自體は、動かしがたい④」とされる。

おそらくそのように理解してよいと思う。たとえば『宋書』本傳で、「五柳先生傳」を引用する際に「嘗て『五柳先生傳』を著わして以て自ら況えて曰く」といい、「命子

詩」を引く時に「又た『命子詩』を爲りて以て之に貽りて曰く」というが、「與子儼等疏」の引用に當たっては、「子に書を與えて以て其の志を言い、幷せて訓戒を爲して曰く」としている。必ずしも作品名と一致してはいない。もっとも、「與子儼等疏」という題じたいがはたして淵明の手になるか否か、はなはだ疑問であり、あるいはもともと題がなかったところに、後人が附けたのかもしれない。しかしながら、もし淵明自身がどういう題をつけたかを考えれば、「與子儼等疏」はきわめて妥當な題であり、少なくとも「疏」という文體名はきわめてふさわしいといえよう。同様に、淵明自身が「歸去來兮辭」という題をつけたかどうかには疑問が殘るが、もし彼が題とつけるとしたら、「歸去來兮賦」では決してなく、「歸去來兮辭」であるだろうことに、誰しも異議はあるまい。

次に他のジャンルの作品を見てみよう。淵明の文集には「停雲」や「時運」など、自序をともなった四言詩がある。その序には「停雲は、親友を思うなり。……」と詩題が見えているが、あえて「停雲詩」とは記していない。「時運詩」についても同じである。もちろんこれは「詩」と書かなくても、詩であることが一目瞭然だからであり、つけない習慣にしたがったからである。

淵明には「感士不遇賦」と「閑情賦」の二篇の賦が傳わっており、いずれも自序を附している。前者では「昔、董仲舒『士不遇の賦』を作り、司馬子長又た之を爲る。……遂に感じて之を賦す」というだけで、序の中に作品名は出てこない。後者では「初め張衡『定情の賦』を作り、蔡邕『靜情の賦』を作る。……余、園閭暇多く、復た翰を染めて之を爲る。……」とあって、ここにも「閑情賦」の名は見えない。にもかかわらず「感士不遇賦」「閑情賦」の題が殘っているのは、淵明自身がつけた題によるにちがいない。二篇の賦の題が淵明自身の作だとすれば、「歸去來兮」が「歸去來兮賦」である可能性はほとんどないといってよい。なぜなら、もし「賦」であるなら、二篇の賦と同様に淵明自身が「歸去來兮賦」と題し、また序の中でも先行する類題の賦を擧げていると考えられるからである。しかし、松浦氏も指摘されるように、そう題してはいないのである。

さてまわりくどい記述になったが、以上のことをふまえて「歸去來兮辭」にもどってみると、がんらいこの作品の題に「辭」が附いていた可能性はきわめて高いし、よしんば後人が「辭」を附加したにしても、作品の本文からしてそれが「辭」のジャンルに屬していたことは、もとからはっきりしていたといえる。

二

「辭」とはいかなる文體であるか。『楚辭』に淵源を發するものであることはいうまでもない。しかし、「辭」單獨で用いられることは少なく、多くは「辭賦」という語で賦とともにひとまとまりになっている。むろんいずれも『楚辭』の文體と共通點をもつからである。ただ重點はやはり賦の方に置かれている。たとえば曹丕『典論』論文（『文選』巻五二）に「王粲は辭賦に長ず。徐幹は時に齊の氣有るも、然れども粲の匹なり。粲の初征・登樓・槐賦・征思、幹の玄猿・漏巵・圓扇・橘賦の如きは、張〔衡〕・蔡〔邕〕と雖も過ぎざるなり」とある。ここの「辭賦」は、

擧例されている作品からしてほぼ賦と同義に使われているといってよい。

『文選』巻四五で「歸去來兮辭」と並んで載録されているのが、漢武帝の「秋風辭」である。

秋風起兮白雲飛　　秋風起ちて白雲飛ぶ
草木黃落兮雁南歸　　草木黃落し雁南歸す
蘭有秀兮菊有芳　　蘭に秀有り菊に芳有り
携佳人兮不能忘　　佳人を携えて忘る能わず
泛樓舡兮濟汾河　　樓舡を泛べて汾河を濟る
橫中流兮揚素波　　中流に橫たわりて素波を揚ぐ
簫鼓鳴兮發棹歌　　簫鼓鳴りて棹歌を發す
歡樂極兮哀情多　　歡樂極まりて哀情多し
少壯幾時兮奈老何　　少壯幾時ぞ老いを奈何せん

武帝が汾陰で后土を祭祀した後、群臣と宴席を開いたときの作であるという序をともなった「秋風辭」は、基本的に毎句三言（もしくは四言）プラス三言で、その中間に「兮」字を挾んでいる。作品全體の途中で換韻しつつ、毎句押韻している點以外に、「歡樂極まりて哀情多し、少壯

幾時ぞ老いを奈何せん」に集約される、作者自身の個人的な感情を抒べている點も特徴の一つとして擧げられる。しかし何と言ってもこの作品が「辭」であることの最大の屬性は、句の中間に「兮」を含む「騷體」といわれるその句形にあって、『楚辭』獨特の句形と結びつくことが擧げられる。

「歸去來兮辭」も、鄕里に歸るに當たっての淵明個人の感懷を抒べている點ではこれと共通し、形式面に着目すると、六言句を基調としつつ、ひとまとまりの四言句を插入していて、比較的整然としている。次に冒頭部分を掲げてみる。

歸去來兮　　歸りなんいざ
田園將蕪胡不歸　　田園將に蕪れんとす　胡ぞ歸らざる
既自以心爲形役　　既に自ら心を以て形の役と爲す
奚惆悵而獨悲　　奚ぞ惆悵として獨り悲しまん
悟已往之不諫　　已往の諫めざるを悟り
知來者之可追　　來者の追うべきを知る
實迷途其未遠　　實に途に迷うこと其れ未だ遠からず
覺今是而昨非　　今の是にして昨の非なるを覺る

隔句押韻である點は、先の「秋風辭」と異なるが、これはたとえば七言詩の、漢代から六朝にかけての毎句押韻から隔句押韻への流れをふまえれば、奇とするに當たらない。むしろ「兮」字がわずか三箇所にしか見られない點が問題である。つまり、「歸去來兮辭」を「辭」たらしめているのは、三言プラス助字プラス二言を基調とする句形もさることながら、「復駕言兮焉求」と二回用いられる「歸去來兮」との「兮」字である。この作品から「歸去來兮」などの句を省いてしまえば、賦とは言えても辭と稱するのはなかなか困難であろう。

「兮」とならんで『楚辭』との關係をうかがわせる表現がもうひとつある。それは「已矣乎」である。井上氏は、[5] 錢鍾書『管錐編』の指摘をふまえ、さらに六朝期の辭賦の用例を檢討して、「歸去來兮辭」の「已矣乎」以下最後の段落が、辭賦の「亂」に相當するという考えを提示している。それによれば、鮑照「遊思賦」、簡文帝「悔賦」など、劉宋以降のいくつかの賦の末尾近くに、「已矣哉」で始ま

る一段落があって、亂辭の屬性を具えている、という。また井上氏は「歸去來兮辭」の「已矣乎」は、亂辭の始まりを示す記號としての役割が大きく、そこに思想性は見出しがたいとされるが、從來「どうしようもない」と譯出されるこの句が、果たして記號としての役割だけに終わるかどうかはなお檢討を要するにしても、「已矣乎」以下が亂の性格をもつことの指摘はきわめて興味深い。

亂として最も早い時期のものとしては、『楚辭』離騷篇のそれがある。

亂曰　　亂に曰く
已矣哉　　已んぬるかな
國無人莫我知兮　　國に人無く　我を知る莫し
又何懷乎故都　　又た何ぞ故都を懷わん
既莫足與爲美政兮　　既に與に美政を爲すに足る莫し
吾將從彭咸之所居　　吾將に彭咸の居る所に從わんとす

ちなみに王逸は「已矣は絶望の詞なり」と注している。「乎」と「矣」は異なるものの、井上氏の言われるように、「已矣乎」と「已矣哉」とは、ほぼ同じと考えてよいだろう。亂の役割は明らかでないが、王逸注に「亂は、理(おさ)むるなり。詞の指を發理して、其の要を總撮する所以なり」とあるのに基づき、全篇の意味をまとめるものと考えてよかろう。

さて「已矣乎」で始まる「歸去來兮辭」の最後の段落を、その直前の部分から續けて引用すると、次の通りである。

農人告余以春及　　農人　余に告ぐるに春の及べるを以てし
將有事於西疇　　將に西疇に事有らんとす
……　　……
木欣欣以向榮　　木は欣欣として以て榮に向かい
泉涓涓而始流　　泉は涓涓として始めて流る
善萬物之得時　　萬物の時を得たるを善みし
感吾生之行休　　吾が生の行くゆく休するに感ず
已矣乎　　已んぬるかな
寓形宇內復幾時　　形を宇內に寓する　復た幾時ぞ
曷不委心任去留　　曷ぞ心を委ねて去留に任せざる

胡爲乎遑遑欲何之　胡爲れぞ遑遑として何くに之かんと欲する

……

聊乘化以歸盡　聊か化に乘じて以て盡くるに歸し

樂夫天命復奚疑　夫(か)の天命を樂しみて復た奚ぞ疑わん

この段落冒頭の「已矣乎」は、亂辭の開始であることを指示すると同時に、「どうすることもできない」意も含むのではないか。具體的には、直前の段落で述べている、萬物が春になると生命の息吹を感じさせるのと對照的に、自分の生が一歩一歩死に近づいて行くのを感じたこと、換言すれば、春がめぐり來て、冬には枯れていた木や泉の水が再び生命を恢復するという、いわば循環する自然界の時間に對して、生から老い、そして死へとつながる直線的で不可逆的な人間の時間を實感したことを指すにちがいない。そしてそのことを「亂」の中で、「寓形宇內復幾時」すなわち、人間がこの世に生きているのはいくばくもない、という表現でまとめあげているのである。

「歸去來兮辭」の最後を、「聊乘化以歸盡、樂夫天命復奚疑」つまり、まずは大自然の變化に任せて死へと歸ろう、かの天命を樂しんでもう何をも疑わない、と自分自身のこれからの生き方を示すことばで結んでいるのは、淵明の作品に常套のまとめかたであるが、「離騷」の亂に「吾將從彭咸之所居」と、主人公が彭咸のもとへ行こうと思う、これからの姿勢を述べて終わっていたことを想起させる。「歸去來兮辭」における『楚辭』の影は、思いのほか濃いといわねばならない。

「歸去來兮辭」の「已矣乎」が、『楚辭』離騷篇の亂の「已矣哉」に近似値を求めうることは、すでに述べた。じつは淵明には離騷篇の「已矣哉」に言及する箇所がある。「士の不遇に感ずる賦」の序に「正を懷い道に志すの士、或いは玉を當年に潛め、己を潔くし操を清くするの人、或いは世を沒するまで以て徒(いたず)らに勤む。故に〔伯〕夷・〔四〕皓に、『安(いず)くに歸せん』の歎き有り、三閭、『已矣』の哀しみを發す」という。屈原が「離騷」の亂で「已矣哉」と述べたことを指す。しかも「感士不遇賦」序は、引

き續いていう、「悲しい夫。形を寓すること百年、瞬息にして已に盡き」と。悲しいことだ、この世に身體を寄せることは長くとも百年、あっという間に死が訪れる。この「三閭發已矣之哀。悲夫。寓形百年、而瞬息已盡」は、「歸去來兮辭」の「已矣乎、寓形宇內復幾時」と酷似しているではないか。

淵明の「感士不遇賦」は、「歸去來兮辭」同様、六言句を基調としつつ、四言句などをまじえている。六言句の四字目に「而」「之」「以」などの助字を置く點でも、兩者は共通している。この賦は、すぐれた才能を有しながら不遇のまま一生を終えた歷代の人物たちをたどり、最後は我が身に引き寄せて「誠に謬會するも以て拙を取り、且つ欣然として歸らん。孤襟を擁して以て歲を畢え、良價を朝市に謝せん」と、俗世での出世を拒絶して、もとの園田の生活にもどろうとする姿勢を示して終わる。この點でも「歸去來兮辭」と似通ったところをもつ。してみると、「歸去來兮辭」が辭であるゆえんは、「兮」字の使用と、「已矣乎」に始まる亂に似た部分の存在とに求められることになる。

繰り返せば、『楚辭』らしさをより濃くひきずっている點に求められるといえる。

三

では、淵明はなぜ『楚辭』を容易に連想させる「辭」のスタイルを選び取ったのであろうか。それを考えるために、いまいちど「歸去來兮辭」にもどってみよう。

まず「歸去來」という獨特の表現に着目すると、唐代の念佛讃歌として傳わっている資料の中に「歸去來」を含むものがある。[6] 釋法照の「歸去來」（「寶門開」）六首[7]から、試みに第一首を次に掲出する。

歸去來　　歸りなんいざ
寶門開　　寶門開く
正見彌陀昇寶座　正に見ゆ　彌陀の寶座の昇るを
菩薩散花稱善哉　菩薩散花　善きかなと稱す
稱善哉　　善きかなと稱す

他の五首も基調は同一で、三言・三言・七言・七言・三言の五句なら成る。五句目は、四句の最後三字の反復で、し

たがって二句目と四句目、そして五句目の末尾で押韻する。さらに釋法照には「歸去來」（「歸西方讃」）十首[8]もある。同様に第一首を掲げると、

歸去來　　歸りなんいざ
誰能惡道受輪迴　誰か能く惡道輪迴を受けんや
且共念彼彌陀佛　且(しばら)く共に彼の彌陀佛を念ずれば
往生極樂坐花臺　極樂に往生して花臺に坐せん

こちらは、冒頭の「歸去來」の後に、整然とした七字句が連續している。また、これは釋法照のものではないが、「隱去來」で始まる歌[9]も傳わっている。

隱去來　　隱れなんいざ
尋空空有有　空を尋ぬれば　空に有有り
畢竟兩無名　畢竟兩(ふた)つながら名無し
二境安心欲何守　二境安心なれば　何をか守らんと欲する
不長不短鑑空心　長からず短からず　空を鑑(み)る心
君見空心還是有　君が空を見る心　還(ま)た是れ有なり
空有俱遣法無依　空有俱に遣れば　法依る無し
智者融心自安偶　智者は心を融し　自ら偶に安んず
隱去來　　隱れなんいざ
勿浪波波走　　浪(みだ)りに波波として走ること勿かれ

これらはいずれも俗世を捨てて隱れ、佛道に歸依するように勸める歌である。すると、「歸去來兮辭」は佛敎の讃歌と深い關係にあるのだろうか。必ずしもそうとは斷言できない。というのも、次のような「隱去來」を含む表現があるからである。

祈孔賓　　祈孔賓よ
祈孔賓　　祈孔賓
隱去來　　隱れなんいざ
隱去來　　隱れなんいざ
修飾人世　　人世を修飾すれば
甚苦不可諧　甚だ苦しく　諧(かな)うべからず
所得未毛銖　得る所は　未だ毛銖ならず
所喪如山崖　喪う所は　山崖の如し

ここに引いたのは、『晉書』隱逸・祈嘉傳の一節である。「祈嘉、字は孔賓、酒泉の人なり。少くして淸貧、學を好

む。年二十餘にして、夜忽ち窗中より聲有りて呼びて曰く」に續くのがこれである。夜突然祈嘉の耳に聞こえてきたのが、右のことばである。「諸」と「崖」が押韻していることからして、「修飾人世」の句には一字脱字があって、本來は後半四句が整った五言であったと推測される。きっと謠諺の類にちがいない。

この聲を聞いた祈嘉は「旦にして逃げ去り、西のかた敦煌に至り、學官に依りて書を誦す。貧にして衣食無し、書生都養と爲りて以て自ら給す。遂に經傳に博通し、大義を精究す」となったという。つまりその翌朝から、世を捨てて學問に志し、儒學者として大成したというのである。彼の耳に聞こえた「隱去來」は、俗世から隱れるように、との天の聲であったのだ。もちろんこの話じたいは多分に脚色されているだろうが、興味深いのは謠諺や歌の形式の中に「隱去來」が見えることである。當時にあってはこうした言い回しがごく普通に使われていたに相違ない。であれば、今日に傳わる唐代の佛教讃歌中の「隱去來」や「歸去來」といった語は、佛教に特有の表現というよりも、むしろ民間でよく知られていた表現を用いて佛道への歸依を勸誘したものと考えられよう。

いまひとつ關心をひかれるのは、この祈嘉と同じ隱逸傳に陶淵明の傳があることである。「隱去來」や「歸去來」という表現は、あるいは世俗から隱れる際に、口頭で常用されていたのかもしれない。そういえば、陶淵明は詩のなかに、口語的、俗語的な表現をあえて持ちこんだ詩人であった。[10] 當時、日常語としては頻用されていたが、詩作品に通常用いない表現を、「歸去來兮辭」で使ったのかもしれない。いずれにせよ、「歸去來」は實際の場所としての園田への歸鄕であるとともに、生き方としての隱逸への歸來であることがあらためて認識させられる。

また、やや時代は降るが、梁の昭明太子が亡くなる前後、世間で流行った俗謠に次のようなものがある。

鹿子開城門　鹿子城門を開き
城門鹿子開　城門鹿子開く
當開復未開　當に開くべきに復た未だ開かず
使我心徘徊　我が心をして徘徊せしむ

城中諸少年　城中の諸少年
逐歡歸去來　歡を逐いて歸去來す⑪

「鹿子開」は「來子哭」をもじっていて、昭明太子の死を武帝が哭したことを指す。「逐歡歸去來」は、太子の長子である蕭歡が嫡孫ゆえ次期皇帝になるはずのところが、武帝の意に染まず、豫章王に封ぜられて歸任したことを暗にいうとされる。ここは押韻の關係上「歸去來」という表現になっているのだろうが、俗謠であることは注目すべきであろう。多分に口語的な言い回しであることは間違いない。

「歸去來兮辭」の本文で、「歸りなんいざ、田園將に蕪れんとす　胡ぞ歸らざる」で始まる冒頭からの十二行は、六言句を基調にして、辭任を決意した經過と歸鄕の樣子を述べる。その中で注目すべきは、第三・四句の「既に自ら心を以て形の役と爲す、奚ぞ惆悵として獨り悲しまん」であろう。自分の心を身體の犧牲にしたこと、すなわち自己の信念をまげて出仕したことを悔いている。のみならず、それを「自ら」行なったことを反省しているのである。蕪れかけていた田園が、實際の園田のことであるばかりか、淵明自身の本來の自己の生き方を意味していることはいうまでもない。

次の八行は四字句の連續で、歸宅の喜びと家中の樣子を述べている。「三逕　荒に就くも、松菊猶お存す」の二句は、庭の三本の小道は荒れ始めているが、松と菊は殘っているの謂いである。よく知られているように「三逕」には基づくところがあって、後漢の蔣詡が官職を辭して隱遁生活を始め、三本の小道を作って隱者以外とは交際を絶ったことから、隱者の住まいをさす。それが荒れ始めていたというのは、役所つとめが八十日あまりであった時間の長さを意味するし、松と菊はそのままであるというのは、本來の自分自身が恢復できたことを示唆する。

續く十二行は元來の六字句にもどり、近景から遠景にゆっくりと視線を移動させながら、家の情景、庭の樣子、さらに外の情景を描く。その中で「門は設くと雖も常に關せり」の句は、世俗との斷絶をあらためて感じさせる。そのことがより強調されるのが、次の段落である。

歸去來兮　　歸りなんいざ
請息交以絶游　請う　交わりを息めて以て游を絶たん
世與我而相違　世　我と相い違う
復駕言兮焉求　復た駕して言に焉をか求めん

「歸去來兮」で始まるこの段落で、世間との交遊をきっぱり斷ち切ることを表明する。世俗は自分と相容れないのだから、また仕官して何を求めようとするのか、ということばには、二度と役所には仕えることなく、隱遁生活を貫徹しようとの斷固とした決意がこめられている。「歸去來兮辭」は、隱逸の決意表明の作でもある。

さて選擇した文體である「辭」が、『楚辭』との關わりを示すとすれば、具體的に『楚辭』のどこを淵明は意識したのだろうか。離騷篇であろうか。すでに述べたように離騷篇の「亂」には、「已んぬるかな」の表現が見え、これは「歸去來兮辭」の末尾段落の書き出しと、看過できない共通點をもっている。また淵明は「感士不遇賦」の序で「三閭、『已矣』の哀しみを發す」と、屈原が「離騷」の亂で「已矣哉」と慨歎したことを指しているのも、すでに述べたとおりである。おそらく淵明にとって、あたら才能を生かせないままで死んだ屈原は、自分自身と重なり合う非常に近しい存在であったにちがいない。その點において、『楚辭』離騷篇のスタイルにならったとしても不思議ではない。

しかし、隱逸という角度から見れば、同じ『楚辭』でも招隱士篇の方が重みをもっていよう。王逸の章句にいう。

「招隱士なる者は、淮南小山の作る所なり。昔淮南王安は、博雅にして古えを好み、天下の俊偉の士を招懷す。八公の徒より、咸な其の德を慕いて其の仁に歸し、各おの才智を竭くし、篇章を著作し、分かれて辭賦を造り、類を以て相い從う。故に或いは小山と稱し、或いは大山と稱す、其の義は猶お詩に小雅・大雅有るがごときなり。小山の徒は、屈原を閔傷し、又た其の文の、天に昇り雲に乘り、百神を役使して、仙の似若き者なるを怪しむ。身は沈沒すと雖も、名德顯らかに聞こゆるは、山澤に隱處すると異なる無し、故に招隱士の賦を作り、以て其の志を章らかにするなり」。

淮南王劉安の門人であった小山の作とされる（『文選』巻

三三は、劉安の作とする）。王逸によれば、小山は屈原をいたんで、肉體がほろんでも名聲が廣まる點において、隱者と同樣であるから、隱者を呼び寄せるこの作品を作って、氣持ちを表したのだという。しかし、內容は屈原とはかかわりなく隱者を招くことをいう。

桂樹叢生兮山之幽　桂樹叢生す　山の幽
偃蹇連蜷兮枝相繚　偃蹇連蜷として　枝相い繚う
山氣巃嵸兮石嵯峨　山氣巃嵸として　石嵯峨たり
溪谷嶄巖兮水曾波　溪谷嶄巖として　水波を曾ぬ
猿狖群嘯兮虎豹嗥　猿狖群嘯して　虎豹嗥ゆ
攀援桂枝兮聊淹留　桂枝を攀援して　聊か淹留す
王孫遊兮不歸　王孫遊びて歸らず
春草生兮萋萋　春草生じて萋萋たり

王逸は「王孫遊兮不歸」の句に注して「隱士、世を避けて山の隅に在るなり」という。隱士が猛獸がほえているような險しい山中に隱れて、世間にもどってこないのである。鬱蒼と茂った山中の描寫が續いた後、すでに出てきた「攀援桂枝兮聊淹留」の句がいま一度くりかえされて、最後は次のように結ばれる。

攀援桂枝兮聊淹留　桂枝を攀援して　聊か淹留す
虎豹鬬兮熊羆咆　虎豹鬬い　熊羆咆ゆ
禽獸駭兮亡其曹　禽獸は駭いて其の曹を亡う
王孫兮歸來　王孫よ　歸り來たれ
山中兮不可以久留　山中は以て久しく留まるべからず

後世、白居易の「賦得古原草」の詩がこの「招隱士」をふまえていることは、よく知られている。最後で、山中は長く留まる所ではないから、早く歸ってくるようにと、よびかける箇所がこの作品の要點といえよう。

「招隱士」において「歸去來兮辭」との表現上の接點は、わずかに「王孫兮歸來」だけにあって、それも「歸去來兮」ではなく「兮歸來」で、つまり、歸りなんいざではなく、歸り來たれであるから、歸る主體も異なっている。また、歸る方向も片や俗世から田園へであり、片や山中から俗世へで、正反對のように見える。そもそも題からして「招隱士」であるから、淵明の歸田とは全く逆である。な

らば、共通點は「兮」と「歸來」という語にしかないのだろうか。

四

「招隱士」は『楚辭』の一篇として知られるが、その後、この「招隱士」をふまえた作品が西晉時代から作られる。[12]

たとえば左思の「招隱」詩二首（『文選』卷二二）がそうであるが、其の一は、冒頭の句「策を杖きて隱士を招かんとす」にこそ「招隱士」なる語が見られるけれども、その實、この詩では世俗にいて山中の隱士を招くのでなしに、自ら隱士を尋ねていくのである。詩中の「絲と竹とを必とするに非ず、山水に淸音有り」は、人工的な管弦の響きよりも自然の中の音樂を善しとするのであろうし、末尾の「聊か吾が簪を投ぜんと欲す」に至っては、仕官を辭めることを意味している。隱士を招きに行って、逆に本人が隱士になるようなものである。「『招隱』が『尋隱』の方向に向っていることを示している」。[13]

左思の同詩其の二は、其の一を承けて、「東山」に「廬」を作り實際に隱棲を始めることから述べはじめる。そして「爵服は常に玩ぶこと無し、好惡に屈伸有り。……惠連は吾が屈するに非ず、首陽は吾が仁に非ず。相い與に尙ぶ所を觀て、逍遙として良辰を撰ばん」と、柳下惠と少連のような「志を降し身を辱め」（『論語』微子篇）る生き方をよしとしないし、伯夷・叔齊のごとき「志を降さず身を辱めざる」（同）であっても、首陽山で餓死してしまうのは、理想ではないとする。結局は自己の貴ぶ道を貫こうとするのだが、これも詩題は「隱を招く」であるが、實際は隱士の山中における生活と思いを述べるにとどまる。

今の詩に見えた「屈伸」「惠連」などの語は、張華の「招隱」詩（『藝文類聚』卷三六）にも出てくる。

隱士託山林　隱士は山林に託し
遁世以保眞　世を遁れて以て眞を保つ
連惠亮未遇　連惠　亮（まこと）に未だ遇わず
雄才屈不申　雄才　屈して申（の）びず

第三・四句は、少連と柳下惠のような人間ではないから、すぐれた才能を祕めたままそれを發揮する場が得られない

ことを歎くようで、「世俗に對する未練」[14]があるように見えるが、『楚辭』招隱士篇とかなり趣を異にしているのは明らかである。

張載の「招隱」詩（『藝文類聚』卷三六）は、「出處は塗を殊にすと雖も、居然として輕易有り。山林には悔悋有り、人間には實に累い多し」と、出も處もともに意に滿たないところがあるように述べ始めるが、最後は「去來して時俗を捐て、超然と世僞を辭せん。意を得るは丘中に在り、安くんぞ愚と智とを事とせんや」と結ぶ。俗世を捨てて山中に隱棲する方向であることはいうまでもない。「去來捐時俗」の「去來」は「歸去來」でこそないが、俗世を去って山中に歸るのである。

陸機「招隱」詩（『文選』卷二二）も張載のと同趣旨である。「至樂は假有るに非ず、安くんぞ醇樸を澆んずるを事とせん。富貴は苟に圖り難し、駕を稅きて欲する所に從わん」という結尾を見れば明らかである。

しかしながら、『楚辭』招隱士篇の延長線上に位置する作品も、同時期に存在する。たとえば閭丘沖の「招隱」詩（『藝文類聚』卷三六）には、

經世有險易　世を經むるに險易有り
隱顯自存心　隱顯自ら心に存す
嗟哉巖岫士　嗟　巖岫の士よ
歸來從所欽　歸り來たりて欽う所に從え

とある。山中にいる隱士に對して、世に歸ってきて自分の望む生き方に從え、と勸めている。隱と顯とは自らの心の持ち方次第だというのだ。

「小隱は陵藪に隱れ、大隱は朝市に隱る」のよく知られた對句で始まる、王康琚「反招隱」詩（『文選』卷二二、なお、「反」はまねる、の意であろう）も同樣に、小隱の例として伯夷を、大隱の例として老子を擧げてから、古えより今に至るまで山中に隱れ住む者はいるが、人間の本性としては仕官するのが望ましい、と說く。最後は、

推分得天和　分を推せば天和を得
矯性失至理　性を矯むれば至理を失う
歸來安所期　歸り來たりて期する所に安んぜよ
與物齊終始　物と終始を齊しくせん

と結んでいる。「歸來安所期」はさきの閭丘沖の「招隱」詩の結び「歸來從所欽」と酷似した表現であって、ともに「歸來」を含むのは、やはり『楚辭』招隱士篇の「王孫兮歸來」をひきずっているからだろう。「歸り來たる」のは、もちろん山中から世俗へである。してみると、「歸り來たる」ことからまず第一に連想するのは、『楚辭』招隱士篇であったのではないか。

しかもこの時期、東晉末期においては、隱者を辟召する風がいつにもまして甚だしかった。そもそも隱者が出仕するのは、時の王朝がいかにうまく治まっているかを示す格好の證明材料でもある。後漢からすでにその風潮は盛行していたというべきだろうが、とりわけ盛んであったのが東晉から劉宋にかけてだといっても、過言ではあるまい。正史の隱逸傳がそれを物語っている。招隱士ということばも、またひとつの重みをもって響いていたにちがいない。「王孫よ　歸り來たれ」という『楚辭』招隱士篇の一句は、仕官と隱棲のはざまにあって搖れ動いていた淵明にとって、めざす方向とは逆のベクトルを示す「歸來」として意識されていたと思う。

隱者を招いて「歸り來た」らせ、仕官させる動きに對して、淵明は「歸り來たる」を反對の意味で使うことによって、アンチテーゼを唱えたと考えられる。つまり、隱者の自分に將來いかなる招きがあろうとも、一切それには應じる意思のないことを、世俗とは逆の價値觀にのっとって「歸來」を使うことで、表明したのではないだろうか。事實、これ以降、再び出仕することはなかった。『楚辭』招隱士篇を連想させる「辭」の文體を用い、しかし「歸來」の意味を逆轉させて使うことで、仕官への訣別を明示し、自分自身ひとつのふんぎりをつけたのではないか。[15]

後漢以來、文學作品の創作にあたっては、同一の類型に屬する先行作品を強く意識していたといえる。その傾向はとりわけ辭賦において顯著であって、それぞれに附された序からその一端をうかがうことができる。淵明もその例にもれない。すでに述べたように、「感士不遇賦」の序で、淵明は董仲舒や司馬遷など具體的な作者の作品を擧例して、自らの創作意圖を明らかにしている。「閑情賦」序におい

ても同様である。

もし淵明が「歸去來兮賦」を書こうとしたのであれば、おそらくその序において、班固の「幽通賦」や、張衡の「思玄賦」なり「歸田賦」なりを引いて、制作に至った經過を説明したと思われる。しかるに淵明はそうはしなかった。「賦」ではなしに「辭」を選んだのである。この時、『楚辭』とりわけ招隱士篇が念頭にあったのではないか。「辭」なる文體を選擇してその延長線上に位置づけておきながら、仕官すべく俗世に歸り來たる「歸來」に對して、價値觀を逆轉させることで、これから隱逸を貫く決斷をあらわしたのだと考えたい。もちろんその底には、西晉の左思や張載らの、隱棲を贊美する方向の「招隱」詩の蓄積があったのだけれども。

註

① 小尾郊一「『歸去來の辭』の意圖するもの」（『東方學會創立四十周年記念東方學論集』、東方學會、一九八七年、二〇三頁）。

② 引用は、通行本の陶澍注『靖節先生集』（文學古籍刊行社、一九五六年）によった。

③ たとえば、岡村繁『陶淵明　世俗と超越』（日本放送出版協會、一九七四年）を參照。

④ 松浦友久「陶淵明の辭賦」（『中國文學研究』第二三期、一九九七年、一一～一二頁）。

⑤ 井上一之「陶淵明『歸去來兮辭』の〝已矣乎〟をめぐって」（『中國詩文論叢』第一三集、一九九四年）

⑥ 吉岡義豐「歸去來の辭について」（『中國文學報』第六冊、一九五七年）は、念佛讃歌などを手がかりにして淵明と佛教の關係を論じている。

⑦ 任半塘『敦煌歌辭總編』（上海古籍出版社、一九八七年）一〇六三頁。

⑧ 注⑦同書、一〇六六頁。

⑨ 注⑦同書、一〇四二頁。

⑩ 拙稿「六朝における陶淵明評價をめぐって」（『未名』第七號、一九八八年）參照。

⑪ 『南史』梁武帝諸子傳。

⑫ 小尾郊一『中國文學に現われた自然と自然觀』（岩波書店、一九六二年）第一章・第二節・四「招隱」の詩を參照。

⑬ 注⑫同書、一五一～一五二頁。

⑭ 注⑫同書、一五五頁。

⑮ 民間で「歸去來」や「隱去來」などの言い回しが常用されていたであろうことも、その背景において考えるべきであろう。